



 福岡銀行

土木建設の現場で活躍する

ユーティリティプレイヤー。

半世紀の実績で地域にも貢献。

株式会社 小山

こやま

取締役会長

小山 敏治 氏

こやま

としはる

代表取締役社長

小山 貴司 氏

こやま

たかし

取引店／福岡銀行相生支店

#### ■会社概要

創業:1970年／設立:1971年／所在地:北九州市八幡西区／資本金:5,000万円／従業員:48名(2023年10月末現在)／事業内容:クレーン賃貸、工事請負、とび・土工事事業、しゅんせつ工事業、土木・舗装・水道施設工事業、石・鋼構造物・塗装工事業、海上・陸上杭打工事、H形鋼・鋼矢板打抜工事、クレーン作業一式、重量・長尺・拡大品・特殊輸送、港湾土木・一般土木工事、橋梁架設工事、重量物据付工事、クラムシェル作業、一般貨物自動車運送事業、貨物運送取扱事業

会社ホームページは  
こちらからどうぞ！





本社前(左から小山貴司社長、  
小山敏治会長、五島頭取)

## クレーンによる積み下ろし作業から スタートして徐々に業容を拡大

当社は、北九州市八幡西区に本社を構える総合建設業者で、荷揚げ、輸送、基礎工事、据付工事までのすべての作業を自社で行っています。当社の創業は、1970年に私の父で現在は取締役会長である小山敏治としはるが興した「小山クレーン」です。父は、熊本出身ながら縁あって北九州の建設業界で働いてきた経験をもとに、中古のクレーンを購入して各種クレーン作業を請け負い始めました。

事業を開始した当初は、コンクリート・パイル（基礎工事で土台に打ち込まれる杭）などの積み下ろし作業が中心でした。やがて現場で取引先からの信頼を得るうちに、「荷も運んでほしい」「杭打ちもやってほしい」といった依頼が届くようになり、クレーン作業から基礎工事、重量物の輸送なども手がけて事業範囲は徐々に拡大していきました。

こうした流れはひとえに、父の「頼まれた仕事は断らない」という信念によるところが大きく、結果的にお客さまや時代のニーズに応えながら事業を進めていく姿勢が、成長の原動力になったのだと思います。

創業翌年の1971年には有限会社へと組織

変更し、1996年には株式会社小山へ商号を改めました。クレーン業務に限らず、総合建設業へと業容を変化させつつあったため、会社名から「クレーン」の言葉を外した結果です。

## 学生時代に垣間見た 父の経営者としての覚悟

ここで私自身の話をしますと、生まれてからというものの、父から「会社を継いでほしい」と言われたことは一度もありませんでした。まして、父の経営者としての苦労を傍らで見えてきた母は、「継いでほしくない」とさえ考えていたと思います。

学生時代、運動が好きで大学の体育学部へ進学して陸上競技に打ち込んでいた私は、保健体育の教員免許を取得し、その方面へ就職するつもりでした。転機となったのは、大学4年生の時の夏休みです。帰省した際に当社で運転手のアルバイトをすることになり、父の送迎役として得意先の会社を訪れました。

そこで思いがけず目にしたのは、父が得意先で、自分よりもずいぶん年下の担当者に頭を下げる姿でした。当時の私には、その担当者の言動が身勝手な横柄であるように見えたため、得意先を出た後、「頭を下げて詫言る必要があったのか」と憤って父に問いかけました。





小山貴司社長



小山敏治会長

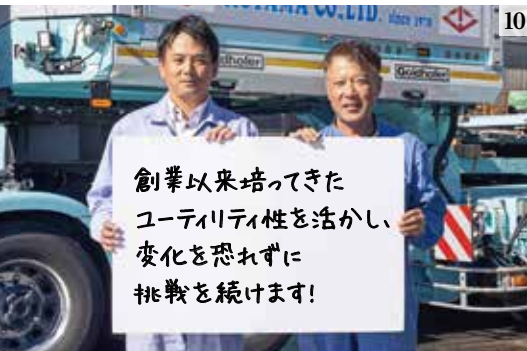
しかし、父は少しも気にかける様子がなく、私はその態度にも驚きました。それまでは家にいる時の父の姿しか知らなかった私ですが、その時に「些末な小事にとらわれずに先を見据えて得を取りにいった」ともいえる、「経営者としての覚悟」を垣間見たことで、父を社会人の先輩としてあらためて尊敬し、その背中を追いかけたいという気持ちがありました。

大学卒業後は、総合建設業を営む岡山の会社に入社。最初は当社へ入るつもりで、業界でやっていたために必要な基礎知識や経験を三年間にわたって積みました。仕事のノウハウはもちろん、集団行動の大切さや、年の離れた職人さんとの付き合い方など、さまざまなことを学びました。当時独り暮らしをしていた部屋の窓から見える水島のコンビナートの眺めは、今でも鮮明に覚えています。

### 港湾関連事業のほかに 鉄道や鉄鋼の分野へも進出

私が当社に入社した1997年頃までは、請け負う仕事の9割以上が港湾関連のものでした。しかし、そのままでは、港湾関連の仕事が減ってしまう状況に見舞われた時に窮地に陥ってしまうのが目に見えています。また、公共工事がほとんどだった港湾関連事業は、稼働が秋から冬にかけての時期に偏っているため、夏場を何とかしのぐ必要がありました。

そこで港湾関連以外に、鉄道関連、鉄鋼関連の業界との取引を新規開拓すべく営業活動にも注力しました。その結果、J-R関連の取引先などが増え、線路ぎわの工事といった公共性が高く規模の大きな案件の実績を重ねられる



1.対談風景／2.最大積載量172トン積みの大型トレーラーを見学／3.トレーラーの運転席／4.重量400トンの大型クレーンを見学／5.トレーラーとクレーンの前で記念撮影／6.洋上風力関連の鋼管矢板打設工事／7.クルーズ船用岸壁の鋼管矢板打設工事／8.鉄道車両の荷役作業／9.140トンの超大型ブロック運搬据付作業／10.企業メッセージ



前列左2人目から小山貴司社長、小山敏治会長、五島頭取、永野支店長(福岡銀行)

ようになりました。

さらに、私が社長に就任してからも、さらなる飛躍を目指して会社を成長させていく取り組みに力を入れました。具体的には、創業以来培ってきたユーティリティ性、つまり活躍の場を選ばずにあらゆる役割を担う姿勢を活かして、荷揚げ、輸送、基礎工事、据付工事と、すべての作業を当社一社で完遂できる活動スタイルを構築しました。

当社の創業以来のスローガンともいえる「創造することから始まる新たな挑戦」の精神が活動の場を開拓してきたわけですが、私は常日頃から社員に対して、難度の高い依頼でも「できそうにない」と諦めるのではなく、「どのようにしたらできるか」を考え、お互いの知恵を出し合って困難を乗り越えていこう、と言い続けてきました。

現状維持で良しとする守りの構えではなく、変化のために失敗を恐れずチャレンジする強い気持ち、組織にとってあるべき未来をもたらしてくれるのではないのでしょうか。

## 大型設備や特殊部品の輸送で 実績を上げ存在感を示す

お客さまや時代のニーズに合わせて変わって

いく。そのような姿勢なくして会社は成長しないものと考えています。競争力強化のために、昨年導入に踏み切ったのがドイツ製の超大型トレッラーです。最大積載量は172トン積みで、船積み用の大型コンテナでも20トン、30トン程度ですから、桁違いの運搬能力があります。

こうした大型トレッラーを使つての大規模な陸送では、たとえば長さ約90メートルの鋼管を運ぶこともあります。その際、道路周辺の建物や電柱などを避けるために、図面をもとに綿密なルートプランを作成する必要がありますし、トレッラーを操作する運転手にも高度な運転技術が求められます。

当社では、大型プロジェクトに対応するための人材確保や技能養成に力を入れておりますが、当初はトレッラーのドライバーや重機のオペレーターについては経験者を採用することで事業を進めてきました。社内に経験豊富なベテラン社員が増えてきた現在では、未経験の新人がベテランのもとで実務を通じて一定期間の指導を受ける形で技能を養えるようになっていました。

## 「SDGs 未来都市」に選定された 北九州市の発展に貢献したい

地域への貢献は、当社および私自身にとって

重要なテーマです。ここ数年、北九州空港の拡張整備事業や苅田港におけるバイオマス発電設備事業、響灘における洋上風力発電設備事業に携わってきました。とくに、次世代エネルギーとして期待されている風力発電に関しては、社員からも「ぜひ貢献したい」という声がありました。今後も、風力やバイオマスといった超大型で重量級の再生可能エネルギー発電設備の輸送などにも取り組んでいく予定です。

時代のニーズに合わせて変化していくにあたり、SDGsへの関心を高めて取り組みを進める姿勢は不可欠だと考えています。具体的には、低公害車の積極導入、ドライバーやオペレーターへの女性の積極起用などです。

また、地域の子どもたちが未来への夢や希望を育むのを助けることも、私たちの使命であり義務であると捉えています。その活動の一環として、地域の恒例行事である「若松みなと祭り」では当社の特殊車両を展示。子どもたちに運転手体験をしてもらうなど、楽しみながら特殊車両を身近に感じてもらう機会を提供することで、この業界に興味をもつ子どもたちが増えることを期待しています。今後も当社の事業、独自の活動を通じて、地域に社会に貢献していくつもりです。

## ■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 五島 久



クレーンによる積み下ろし作業に始まった当社は、今やクレーン、トレッラー、台船といった多数の大型重機を駆使するスペシャリスト集団として知られる企業に成長しました。創業者である会長の「頼まれた仕事は断らない」という信念、それを引き継がれた社長が「どうしたらできるのか」と常に前を向く姿勢は、私たちも大いに見習わなければなりません。

創業から50年、様々なチャレンジを経て成長を遂げた当社が見据える次のステージを大いに期待しつつ、私たちもそのチャレンジにご一緒させていただきたいと思います。



熊本銀行

半導体産業の集積に呼応して  
高度専門人材の育成に注力。  
他大学や銀行と地域活性化にも。

国立大学法人熊本大学

学長  
小川久雄氏

取引店／熊本銀行浄行寺支店

#### ■大学概要

設立:1949年／所在地:熊本市中央区／学部:  
文学部、教育学部、法学部、理学部、医学部、  
薬学部、工学部／大学院:人文社会科学部、  
社会文化科学教育部、先端科学研究部、自然  
科学教育部、生命科学部、医学教育部、  
保健学教育部、薬学教育部、教育学研究科

大学ホームページは  
こちらどうぞ！





五高記念館前にて(左から小川学長、野村頭取)



## 6校の官立学校が統合されて 発足した歴史ある総合大学

国立熊本大学の発足は1949年。歴史としては、1887年に設立された第五高等中学校を前身とする第五高等学校、熊本工業専門学校、熊本師範学校、熊本青年師範学校、さらに1756年、細川重賢ほそかわしげかたが創設した「再春館」ばんじえん「蕃滋園」を前身とする熊本医科大学、熊本薬学専門学校。この6校の官立学校が統合され、九州における中核的综合大学としてスタートを切りました。

歴史を有する大学ですから、キャンパスは歴史的建築物や設備、銅像、記念碑の宝庫です。重要文化財である赤レンガの五高記念館には当時の教室が再現され、出身の池田勇人いけだはやくと元首相が寄付した太鼓などを展示。表門（通称赤門）や100年以上前の機械が動く工学部研究資料館、化学実験場、肥後医育ミュージアム、熊葉ミュージアムなどのほか、教壇に立った夏目漱石なつめそうせきや小泉八雲こいずみやくも、嘉納治五郎かののじごろうの記念碑もあります。施設は広く一般に開放し、キャンパスのミュージアム化を目指しています。

## 教育、研究および社会貢献を 活性化させるための改革へ

熊本大学はこれまでに12万人以上の人材を社会へ送り出しています。今後は、より地域と世界に開かれた場となり、共創を通じて社会に貢献する教育研究拠点となるために、「常に発信し続ける大学」「常に外から見える大学」「常に外からの声に耳を傾け、発展し続ける大学」を目指し、さらなる改革へ向けた取り組みを進めています。

改革への取り組みにおいて私が重視しているのは、良き指導者を集めるとともに若い学生や研究者を育成すること。良き学生、若手研究者は良き指導者の下に育ち、それによって大学は活性化すると考えています。そのために、多様な人材を登用し、全教職員が組織や部局の垣根を越えて理想的な教育の形成に携われるよう、全力で改革を進めています。

また、急速に変容していく社会情勢のなかで、大学は大きな変革期を迎えています。いかに教育、研究、社会貢献を活性化させながら未来に進んでいくかが問われていると言えます。

教育、研究、社会貢献を始めとするあらゆる指標において、国立大学トップ10以内の大学を



5



3 1



6



4 2





小川学長

目指して、本学の強み、特色を踏まえた一層の機能強化を図り、改革を促していきたいと考えています。

## 大学発足以来75年ぶりに 新学部を創設

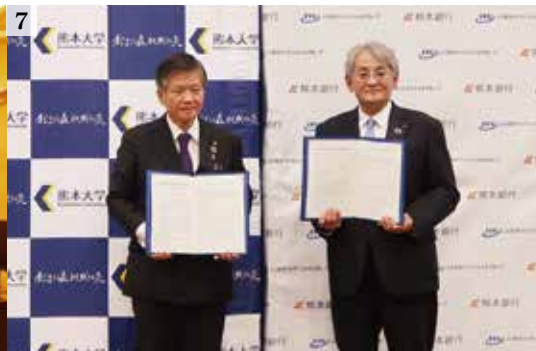
そして、この熊本もまた「100年に一度」といわれる変革期を迎えています。半導体製造の世界的大手であるTSMC(台湾積体回路製造)の熊本県菊陽町進出によって、かつて「シリコンアイランド」と呼ばれた九州で半導体関連企業の工場新增設が再び盛んとなり、今後10年間に年間1,000人規模の人材が不足するとも言われています。

いわば、TSMC進出は熊本にとって、まさに100年に一度のチャンスといえます。大量にIT人材が求められる環境に対応するには、「高度な英語力とデータサイエンス力のあるグローバルな人材」の育成が急務であると考えます。そのような状況にスピード感をもって応えるべく2024年4月、文理融合の新学部「情報融合学環」と工学部に「半導体デバイス工学課程」を創設することにしました。

情報融合学環に関しては、大学発足以来、75年ぶりの新学部誕生となります。

情報融合学環には「DS(データサイエンス)総合コース」と「DS半導体コース」を設け、入学定員60名の少人数制による高度な専門教育を実施します。DSはデータをさまざまな手法で分析し、データの裏に潜む法則性や解決すべき課題を導き出す学問として注目されており、総合コースはAIやビッグデータ分析、情報処理、統計学を含むDSについて総合的に学ぶコースです。もう一方の半導体コースは、DSに加え半導体の知識を専門的かつ実践的に学び、半導体を含む製造DX課題に向き合っテデジタル産業をけん引する人材の育成を目的としています。

工学部の半導体デバイス工学課程は、半導体



- 1.対談風景
- 2.重要文化財の表門(赤門)を見学
- 3.重要文化財の五高記念館の階段で記念撮影
- 4.1945年頃の五高記念館の模型を見ながら歴史の説明を受ける様子
- 5.元内閣総理大臣池田勇人から寄贈された太鼓
- 6.先進軽金属材料国際研究機構(ILM)開所記念式典
- 7.熊本銀行との包括連携協定締結式
- 8.熊本銀行から出向中の大畑調査役
- 9.クラス1クリーンルーム
- 10.文学部附属国際マンガ学教育研究センター
- 11.大学メッセージ





工学部百周年記念館にて。前列左3人目から宮尾理事、小川学長、野村頭取、立木執行役員(熊本銀行)、荒木支店長(熊本銀行)

の研究開発に必要な物理、化学、材料、機械などの基礎学問を修得し、半導体製造過程における基盤的専門知識を備えた、製造・評価・開発に携わる人材の育成を目指します。この専門課程の設置にあたり、学内に約130平方メートルのクラスクリーンルームを新設しました。大気中のゴミがなく温度や湿度を管理した状態で半導体製造を実践的に学べる本格的な環境です。

### 各部署の強みを活かした 共同研究と新分野研究

本学では、これまでもさまざまな共同研究をおこなってきました。半導体関連の共同研究に関しては、さらなる研究力の向上には研究スペースの不足が課題として見えてきたため、半導体関連基礎研究を中心に本学や九州大学に加え、企業も巻き込んで共同研究に取り組める施設の計画を進めています。

大学敷地内に5階建て、延べ床面積3,050平方メートルの建物を新設する計画で、来年度中の完成を見込んでいます。「DXイノベーションラボラトリー(仮称)」として、先端研究設備や、さらにもう一つのクラスクリーンルーム、

企業ブースも設け、学生と研究者が共同で研究に参画できる画期的な施設となる予定です。

半導体関連以外でも、自然科学系における共同利用・共同研究拠点となる「先進軽金属材料国際研究機構（ILM）」の設置や、国立大学初となる「文学部附属国際マンガ学教育研究センター」の設置など、各部署の強みを活かした共同研究や新たな分野の研究に取り組んでいます。

### 地域活性化を目指すために 銀行も巻き込む「産学官金連携」

他大学や地元企業、自治体との連携の輪に、銀行も加えて取り組みを進めていくのが、地域の活性化には大事だと私は考えます。企業と大学研究者の共同研究を銀行が支援するスキームを構築するのです。

この考えは、私が国立循環器病研究センターで理事長を務めていた時の経験から生まれたものです。大学が有する研究成果と企業が培ってきた技術力に、銀行がもつネットワークや地方創生に関するノウハウを合わせ生まれる「共創」が、地域の持続的発展につながると考え、有機的な連携を促す取り組みを進めています。

一方で、熊本県立大学、東海大学との3大学連携による、文部科学省の地域活性化人材育成事業「SPARC」くまもとの未来を拓くグローバルDX人材育成プロジェクト」も進行中で、本年3月にキックオフシンポジウムを開催しました。銀行は広い視野をもち、東海大学には農学部があり、県立大学は情報やビジネスを学べる新たな専攻を設置予定です。お互いを補い合いながら連携を続け、最終的には地域の就職率向上と地域活性化につなげたいと考えています。

### 半導体政策が生む熊本の未来と その先を見据えて

熊本は今、半導体政策の拠点として注目されていますが、たとえば十年経った時に半導体だけに固執しているようでは、熊本の未来への希望はそこで潰えてしまうかもしれません。半導体に端を発した新たな産業を生み出せるかどうかがカギです。

半導体を一つのきっかけとして、本学は、人材育成と研究推進を地域だけでなく広く海外にも開放し、オープン・イノベーションを展開しながら、イノベーションの好循環の創出に努めていきます。

## ■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 野村 俊巳

明治20年に設立された「五高」から数えると136年もの歴史を有する熊本大学は、来年で大学発足から75年を迎えます。半導体大手のTSMCの熊本進出に呼応する形で、来春にはDX人材育成を目的とした新学部の開設、工学部への新課程設置がなされ、共同研究拠点も新設されるとのこと。企業や他大学、自治体、銀行との「産学官金連携」にも意欲的に取り組んでおられます。

地元で活躍できる半導体人材の育成と先進的な研究を通じて、ますます地域に貢献されるものと期待しています。





トップに聞く!

十八親和銀行

長崎が誇る歴史的建造物を  
修復して後世に残すとともに  
保存技術を伝承する。

株式会社 日東建設

にとうけんせつ

代表取締役

大田 光敏 氏

おおた みつとし

取引店／十八親和銀行 稲佐支店

#### ■会社概要

設立:1957年／所在地:長崎市／資本金:2,000万円／従業員:22名／事業内容:総合建設業、不動産事業、土木、建設、とび・土工、舗装、塗装、防水、水道施設工事業、給排水管ライニング工事

会社ホームページは  
こちらからどうぞ!





当社が保存修理を手掛けた国指定重要文化財 旧グラバー住宅前(左から大田社長、山川頭取)

## 4名の職人を率い 工務店としてスタート

長崎の地において総合建設業を営む当社は、私の母方の祖父である宮近三郎みやちかひさによって創設されました。1957年、曾祖父みやちかひさ(私の母方)が経営する大和建設から独立する形で工務店を立ち上げたのが始まりです。

当初、従業員は大工さん3名と左官さん1名だけだったようです。小さな工務店ながら志は大きく、「朝日は東から昇り西に沈む。日本の西の端にあるこの長崎で、一日を照らし続ける太陽のように、頼れる大きな存在となる会社でありたい」と願って、「日東建設工務店」と名づけたと聞いています。

三菱長崎造船所施設課から受注した工事を皮切りに、木造住宅の建設や長崎税関の修繕工事などを請け負い、1962年に有限会社日東建設に組織を変更。造船所構内の工場修繕、三菱長崎造船所信用組合の新築工事と、徐々に鉄筋コンクリート造の施工も手がけるようになっていきました。

## 公共工事へと舵を切り 大規模施設工事で実績

1971年、現会長であり私の父である大田

義弘よしひろが日東建設へ入社したのを機に、当社は県立高等学校を始めとする公共工事に着手。各高校の修繕工事を手がけるようになり、1973年の長崎水産高校の相撲道場新設工事が初めての大きな仕事であったそうです。

1982年には株式会社日東建設に組織変更。その2年後には、建設業の許可を一般建設業から特定建設業へ変更しました。社長の宮近三郎が長崎造船所関連の工事を、専務取締役の大田義弘が公共工事を手がける形で双方において実績を積んでいき、学校や集合住宅といった大規模公共施設の工事、民間では長崎総合科学大学の新築や病院の改築などに携わりました。

1998年に大田義弘が代表取締役就任した当時、当社近辺にあった建設会社の多くが廃業している状況でした。その6年前に入社して現場での経験を積んでいた私に、父が「既存の事業だけに目を向けていても、経営が危うくなりかけた時に一気に窮地に立たされる。そうならないように、日頃から視野を広げ、人脈を広げ続けるのが大事だ」と、言っていたのが思い出されます。

## 長崎の歴史的建造物を 自分たちの手で守りたい

当時の状況に父の言葉の意味を実感した





大田社長

私は、長崎商工会議所青年部に入り、異業種の皆さんとも交流を深めながら人脈を広げる活動に力を入れました。地元の長崎に対する大勢の人たちの思いを知るとともに、私自身のなかの「地元」に貢献したい」という気持ちを再確認しながら、仕事に打ち込む日々でした。

そして、2004年度の史跡「出島和蘭商館跡」第2期建築物復元工事に携わった経験が、当社の大きな転機となりました。

近代日本の歴史を作ってきた長崎。そこに生まれ育った長崎人として、「歴史的建造物を自分たちの手で守る」という気概が社内に満ちあふれるようになり、長崎を思うがゆえの使命感は、次第に当社の明確なビジョンに変わっていききました。

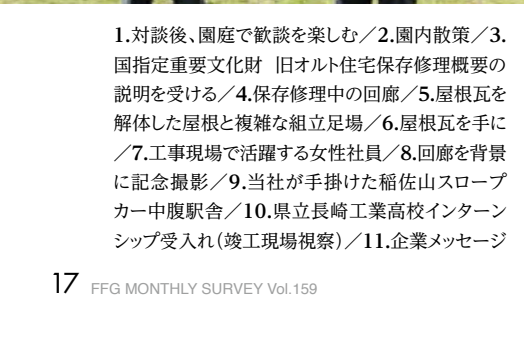
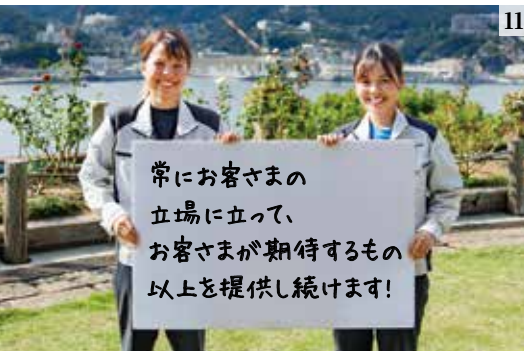
その結果、国指定重要文化財の旧羅典神学校（2010年度）や旧長崎英国領事館（2015

年度）の保存修理工事を経て、「出島和蘭商館跡」第3期工事（2016年度）を施工、出島和蘭商館16棟のうち8棟を復元するに至りました。その後2021年には世界遺産でもある旧グラバー住宅保存修理工事を完成させ、現在は、グラバー園内にある旧長崎地方裁判所長官舎耐震補強工事と旧オルト住宅保存修理工事、史跡小菅修船場跡（通称そろばんドック）の保存整備工事等を手掛けています。

### 使命感がなければ できない仕事

当社が手がける歴史的建造物の修理は、一般住宅や施設の工事とは違って、古くなったから壊して土台から造り直す、というわけにはいきません。修理のために一度解体しても、なるべく元の部材を使って、当時の工法で組み直すのが基本です。

旧グラバー住宅の修理では、前回の保存修理（1968年）以降に新たな古写真などの資料が見つかっていましたので、設計者と共同してこれら資料の再検証を行い、極力今回の保存修理に反映するなど、文化財としての価値を高めることができました。また、漆喰や瓦などの材料についても、配合を変え、試験施工を繰り返し行うなど、耐久性はもとより見栄えにも



1. 対談後、園庭で歓談を楽しむ
2. 園内散策
3. 国指定重要文化財 旧オルト住宅保存修理概要の説明を受ける
4. 保存修理中の回廊
5. 屋根瓦を解体した屋根と複雑な組立足場
6. 屋根瓦を手に
7. 工事現場で活躍する女性社員
8. 回廊を背景に記念撮影
9. 当社が手掛けた稲佐山スロープカー中腹駅舎
10. 県立長崎工業高校インターシップ受入れ（竣工現場視察）
11. 企業メッセージ





最前列左3人目から大田義弘会長、大田光敏社長、山川頭取、北條支店長(十八親和銀行)

こだわり修理を行いました。このように、勉強と試行錯誤を繰り返す日々が続きますが、施工前の下準備やコミュニケーションが重要な工程であるため、一般的な建物の建設よりも時間と労力がずいぶんかかり、根気も必要となります。

それでも、文化財などの歴史的建造物の修理と保存は、私たち自身が誇りをもって従事できる仕事だといえます。現在、旧オルト住宅やその他の歴史的建造物を担当している当社の社員には、前職が長崎市の職員で、その当時は保存修理工事の発注者側であった者がいます。

本人が言うには「高校生のころから文化財が好きで建築士を取得し、管理者の立場で長崎の文化財保存に携わるようになったが、日東建設の仕事ぶりを目の当たりにするうち、管理ではなく自分自身の手で修理を手がけたいと思うようになった」とのこと、四十代後半で当社へ入社してくれました。文化財に対する思いが非常に強く、文化財の仕事を中心に会社を牽引してくれています。

またこのところ、地元の長崎工業高校の卒業生が毎年入社してくれています。「長崎の宝は長崎人が守る」という意気込みをもった若い人たちが仲間になってくれるわけですが、長崎にしかない貴重な文化財建造物を後世に残す

とともに、失われつつある保存・修理技術の継承にも力を入れていかなければ、という思いを新たにしています。

## 技術者集団として研鑽しつつ オンリーワン企業へ

2014年より私が三代目として経営のバトンを引き継ぎ、歴史的建造物への積極的な取り組みに加えて、稲佐山スロープカー駅舎、神の島市民プールといった市民が多く利用する施設も施工させていただくようになっていきます。なかでも、外海中学校新築工事では、初代宮近三郎の故郷に錦を飾ることができました。

土木工事においては、優秀な技術者の増員によつて新たに下水道管路工事にも参入し、さまざまな大規模土木工事で実績を積んでいます。さらに、新技術の導入と独自技術の開発にも注力しています。

たとえば、長崎ではまだ普及していない、金属劣化によつて赤さび水が出るようになった古い給排水管を再生する施工技術をいち早く取り入れました。これは「吸引式ライニング更正工事」という工法で、壁や床を剥がして給排水管を取り替えるのではなく、既存の管の内側を研磨材でクリーニングした後に特殊な塗装材でコーティングします。わずか二日間の水道使用

制限で給排水管をよみがえらせることができるため、お客さまにも大変喜ばれています。

当社の独自技術に関していうと、特殊防音施工が他社にはないめずらしい技術と言えるでしょう。ある時、友人からドラム室を備えた住宅を造ってほしいという相談を受けました。ドラムの音はジェット機離陸時と同じ130デシベルであり、ピアノ練習用の防音室よりはるかに難しい施工です。専門防音メーカーが木造住宅に併設するのは困難だという難工事でしたが、社員一同で知恵を振り絞り、あらゆる材料と工法の組み合わせを試行錯誤しながら、最終的には満足していただける物を無事完成させることができました。難題に立ち向かう知恵と工夫が、独自技術の開発につながった良い事例であったと思っています。

こうした、全員が一丸となつての技術研鑽のかがみがあつてか、長崎市による建築工事と土木工事に関する優秀工事表彰において、直近10年間で6度の優秀賞を受賞させていただきました。今後も技術者集団として邁進し、「日東建設にしかできない」と言われるような、世の中に必要とされるオンリーワン企業を目指していきます。

## ■ インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 山川 信彦

学校やプール、集合住宅などの公共施設等を中心とした建築工事から、擁壁の造成などの土木工事まで、総合建設会社として六十年余りにわたって、長崎のまちづくりに携わってこられました。

とりわけ、近年では地元の文化財や歴史的建造物の保存・修理にも力を尽くしておられ、その高い志と技術力を兼ね備えた当社は、長崎に無くてはならない存在だと言えるでしょう。

大田社長とは若い頃に地元のビジネスパーソンの交流会でお会いしており、長崎の将来についてお互いの夢を語り合ったことが懐かしく思い出されます。

長崎の貴重な景観を守るために、今後も引き続き社業に注力されるよう願っています。

